

先進地における下水汚泥の炭化技術を調査

経済建設常任委員長 村田 安男

当委員会は、5月13日東京都下水道局東部スラッジプラントを視察し、下水汚泥の炭化について調査した。

調査項目

下水汚泥資源の有効利用についての先進的取り組み

調査経過

平成19年1月、群馬県から下水汚泥の炭化に関する技術紹介があった。これを受け、今年3月、県下水道課に説明を依頼し、汚泥処理について調査した。今回の調査は、営業プラントとして稼動している現状について検証すべく、視察を実施した。

調査内容は、

①東京都下水道局東部スラッジプラントにおける汚泥炭化事業について

②下水汚泥から炭化物を製造し、火力発電所の石炭代替燃料として利用している状況について

考察

東部スラッジプラントには、一日800トン程度の汚泥が搬入され、300トンが炭化処理されている。

この汚泥は、砂町・三河島・有明の各水再生センターにおいて、汚水処理の過程で発生したものであり、脱水状態で搬入される。

①汚泥炭化炉としてのプラントは、1基（100トン/日）当たり約50億円。

②臭気などの公害対策には、二重三重の対策が講じられており、通常では発生しない。

③煤煙処理は、煤煙処理設備により、従来の焼却炉に比べ、約8割の削減が可能。

④設置場所が埋立地であること。以上のことが、この事業を可能にしていると考察した。



東部スラッジプラント（東京都江東区）



現地で説明を受ける委員

町ぐるみの食育に取り組む 甲州市を視察

文教福祉常任委員長 中里 知恵子

当委員会は、5月14日山梨県甲州市を視察し、食育について調査した。

調査項目

食育推進事業の先進的取り組み

調査経過

食育事業の先進地である甲州市は、塩山市と東山梨郡勝沼町・大和村が平成17年11月に合併し、発足した。人口は、玉村町とほぼ同じ3万6000人、面積は約10倍である。標高460mほどの盆地には、勝沼ぶどうで知られる果樹栽培が行われている。

近年、日本人の食をめぐると状況には、栄養の偏り、不規則な食事、生活習慣病の増加など、様々な影響が

出ている。同市においても同様の傾向にあるため、「甲州市食育推進計画」が立てられた。

計画は保健センターを中心にすすめられたが、食育は全課にわたる課題であるため、平成17年に「甲州市食育推進会議条例」を制定した。

調査の結果、住民各層の人たちは、共通して野菜の適量摂取に不足が見受けられた。そのため、同市の食育事業は野菜摂取を最優先課題として出発し、町ぐるみの取り組みに発展しようとしている。

また、同市では、食育推進のための独自のツールとして、『塩山式手ばかり』を開発した。この手ばかりは、甲州市

民3595人の手の大きさと身長を調査した結果、「手は発育のものさしになる」ことがわかり、そのデータをもとに作成されたものである。自分にあつた分量が一目でわかるため、市民にも広く普及している。

考察

玉村町では、学校教育課・健康福祉課が中心となり食育事業をすすめているが、甲州市は全課を挙げて取り組んでいる。

甲州市では、食育推進会議を構成している25人の委員の人選に腐心し、食育に興味があり、活動していただけの人を選んだ。委員がプロジェクト・チームとして活動している点など見なし、貴重な視察となった。



簡単に計れる『塩山式手ばかり』
(制作/甲州市・健康づくり推進協議会)



説明を受ける委員